

[要旨]

R.W. コンネルの男性性理論の批判的検討

——ジェンダー構造の多元性に配慮した男性性のヘゲモニー闘争の分析へ——

川口 遼

これまで日本の男性性研究はレイウイン・コンネルの男性性の多様性と階層性をモデル化した理論に依拠して、研究成果を積み上げて来た。しかしながら、コンネルの男性性理論が、現代日本社会におけるジェンダー構造あるいは男性性の配置 (configuration of masculinities) を分析する上で適切なものであるかどうか、十分な検討がなされてきたわけではない。

本稿では、現代日本社会をジェンダー・セクシュアリティにまつわる、多様かつ矛盾する価値が併存する多元的変動社会と評価した上で、そのような社会を分析するにはコンネル理論の「男性性の階層関係の先験的な措定」という特徴と、それによって引き起こされる「男女間の関係性の後景化」という弊害の、乗り越えが必要となることを論証する。前者は、男性性間の階層関係が経済構造といったジェンダーとは関係のない構造によって決定されているかのように論じる傾向を指す。後者は、その傾向によって議論の焦点が男性性間の関係性にのみ当てられることとなり、本来注目すべきであった男女間の関係性が分析上、後景に退いてしまうことを指す。その上で、現代日本社会において、男性性の観点から男性による女性の支配を含むジェンダー構造を分析するには、男性間のヘゲモニー闘争の結果ではなく、プロセスに注目する必要があること、そしてジェンダー構造を多元的に理解する必要があることを主張する。